

協力ゲーム

目的

医療職が1人で業務に当たることは少なく、むしろ、安全で質の高い医療を提供するために、他の医療職とチームを組んで、役割を分担しながら業務に当たることが多い。また、医療職だけではなく、地域の福祉職や患者・家族会、市民・ボランティアなどとも連携しながら、地域全体で健康問題に取り組む地域包括ケアも、盛んに行われている。そうすると、他職種や市民・ボランティアなどとも上手く連携しながら、協力して業務に当たる能力が、医療職には求められることになる。

ここで紹介する協力ゲームは、他者と上手く連携し、協力関係を築くための基本的な条件を学ぶ演習である。

方法

①3～4人一組でテーブルに着席する。各自がA5サイズのカード（片面のみ罫線）を適当に破りながら、3人一組の場合には一人6枚の紙切れを、4人一組の場合には一人5枚の紙切れを作る（図1）。

③世話役を1人決めて、各自が作った紙切れをすべて、世話役の手元を集める。

④世話役は手元の紙切れを十分にかき混ぜたうえで、ちょうどトランプのカードを配るように、自分も含めた全員に同じ枚数の紙切れを配る。

⑤合図とともに、世話役はストップウォッチをスタートさせる。そして、各自がそれぞれに紙切れを交換しながら、元のカードを再現する。作業中には、他の人の紙切れを勝手に持っていったり、要求したりすることができず、他の人に紙切れを提供することしかできない。

⑥グループメンバー全員の作業が完了したら、世話役はストップウォッチを止める。作業を開始して5分間が経過したところで、完成していなくても全員が作業を中断する。

⑦「もっと早く完成させるためには、どのように取り組めばよいのか」を考え、各自がアイデアのリストを箇条書きで作成する。3分が経過したところで各自が順番に発表して、アイデアを全員で分かち合う。

補足

作業中、自分の目の前にたくさんの紙切れが集まってしまった人は、自分の四角形しか見ていなかった可能性がある。上手く協力するには、自分だけを見てはダメで、自分と周りの両方を見ることが大切である。別の言い方をすれば、自分も含めた全体が見えていることが大切なのである。

また、自分に要らないものをいつまでも持ち続けず、できるだけ速やかに誰かに回さな

なければならない。その際、誰に渡せばよいのかを判断しなければならず、適当にバラ撒いてはいけない。

さらに、チーム内で我先に競い合う必要はなく、常にチームで早くゴールすることを目指す。そのために自分を後回しにして、早くできそうな人から優先して完成させること必要である。

アイデアを分かち合ったところで、次の取り組み方を各自が自己決定し、もう一度、④～⑥に取り組むと、学習効果がさらに増す。

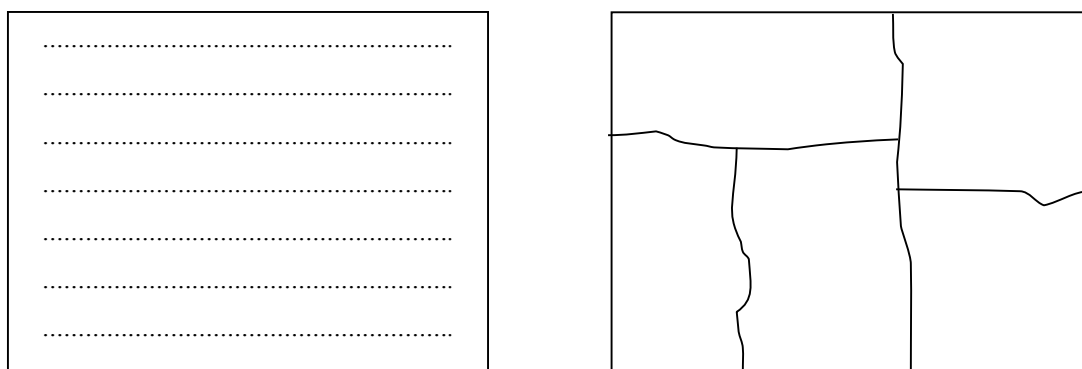


図 1 : 作業カードの例

文献

- 1) 諏訪茂樹：対人援助とコミュニケーション 第2版 ―主体的に学び、感性を磨く―、中央法規出版，2010

(諏訪茂樹)